

学校5日制にともなう中学生の生活時間構造の変化

○ 吉原崇恵* 池田真由美** 副島 圭*

(* 静岡大教育 ** 森村学園)

<目的>筆者らは1992年学校5日制の実施を前に中学生を対象に生活時間の調査を行った。92年の調査と比較し、以後の休みの土曜日の過ごし方の特徴を把握することが一つの目的である。また、休みの土曜日が実施されることにより中学生と親との共有時間が得られたかどうか、さらにそのことによって親子の関係に影響が見られるのかどうかを明らかにする。 <方法>対象は前回と同じく中学2年生130名、自記式即日記録である。調査期間は1995年10月から11月である。親子の共有時間についての調査は父母：保護者にも行った。対象学校は前回とは異なるが地域による偏りがないように商業地、住宅地、農村部にある学校にした。分析は前回調査とともに90年NHK調査と比較した。 <結果>①前回調査で、中学生は平日の睡眠不足を休みの土曜日に寝だめをして取り戻し、少ないエネルギーで出来るテレビ視聴をしていた。今回その傾向がいつそう明確になった。休みの土曜日は塾や家庭学習、家事が減少し、テレビ、レジャー、団らんが増えていた。休みの土曜日でのんびり出来る様子がうかがえた。しかし、続く日曜日には部活があり拘束時間は増え、社会的文化的な生活時間が減っていた。②親子の共有時間はそれを持った割合が少ないことが特徴である。共有時間を持ったグループと持たないグループを比較するとお互いに相手の立場に立って理解することなどで違いが見られた。また、自立を志向する中学生とはいえ親との接触時間をもっと増やしたいと考えていた。③休みの土曜日のあり方は他の曜日の生活や家族生活のあり方に関わってくる点で注目される。